書評

100 万回生きたねこ[1]（作・絵　佐野洋子）
—誤読されるテキスト

鍛治谷　静 *

The Cat That Lived a Million Times by Yoko Sano
– The text misread

Shizuka Kajiya

話せば分かるとはいうものの、話しても話しても通じない、通じたと思っていたらそれがこちらの思い込みで相手はまったく別物と取り違えていた、とはよく経験するところである。われわれは相手に通じない、取り違えが生じたのは自分の話し方が悪かったのかもしれない、もっと別の言いようがあったのかもしれないと反省したり落ち込んだりする。取り違えた相手が悪いと怒りや恨みを抱くこともある。かようにわれわれの感情が波立つのは「話せば分かる」を手放せないからである。

そもそも「分かる」とは何であろうか。コミュニケーションの教科書[2]をひもとけば、以下のように説明されている。

話すという行為に用いられる言語はシンボル（記号または象徴）の代表的なもので、話し手が伝えたい意味をシンボルに翻訳し、聞き手はそのシンボルに託された意味を解読する。翻訳した意味と解読した意味が同じであれば問題はない。すなわち、話し手からすると話し手の伝えたい意味が聞き手に通じた、聞き手は話し手の話が「分かった」となる。

ところが、解読が誤読になる可能性がある。話し手が翻訳したシンボルが、聞き手には話し手と違った意味を指し示す場合があるからである。たとえば、ある幼児が人に向かって「帽子」と言う。それを聞いた者は、「頭に被るもの」「日除け」等の用途をはたす着用品の一種を思い浮かべるだろう。しかし幼児は言うなり戸口へ向かって走り出した。幼児は外出時に必ず用意される「帽子」を「外に行きたい」という要求を指し示すシンボルとして使用したのである。

言語以外のシンボルもある。われわれは目に映じた形態や色など非言語的シンボルからも多くの意味を受け取っている。たとえば友人の表情から何かあったのかと心配する時、われわれはその表情からいつもと違う顔色の優れなさを認め、それを「何か良くないことがあった」と解読しているわけである。友人は夜通し遊んでいて睡眠不足から目の下を黒くしていただけかもしれないのに。

つまり、シンボルと意味は一対一の関係になく、解読するのは受け手であるので「意味はシンボルの受け手にある」[3]。話せば分かるは話し手が聞き手（受け手）をかき口説くときに使われるが、分かるかどうかを決めるのは残念ながら話し手の領分にない。

佐野洋子氏が世に出した「100 万回生きたねこ」という絵本がある。約 35 年前に出版されて以来読み継がれてきた絵本である。「100 万回生きたねこ」は、話せば分かるを否定する絵本なのである。

絵本の物語前半は、100 万年の間、ねこを飼っていた 100 万人の飼い主たちとのエピソードが同じパターンで繰り返される。すなわち、飼い主はねこが大好きだったがねこはどの飼い主も大嫌いだった。ねこが死ぬとどの飼い主も嘆き悲しむが、ねこは「しぬのなんてへいき」とうそぶき、100 万回死に 100 万回生きかえる。

後半物語は転回し、ねこは飼い主のないのらね

＊　四條畷学園短期大学　保育学科

ことなり白いねこと出会う。二匹はたくさんの子ねこを産み育て、ねこは白いねこといっしょにいつまでも生きていたいと願う。しかし、ある日白いねこは死ぬ。うごかなくなった白いねこを抱いて100万回泣いた後、ねこも死ぬ。そして「もう、けっして生きかえりませんでした」と物語は結ばれる。

以上のどこからも「話せば分かる」を実現している二者関係は見い出せない。飼い主たちとねこの間は当然ながら、ねこと白いねこの間でさえ、それは疑わしい。どんなにねこを愛しても飼い主たちが報われなかったように、白いねこといつまでも生きていたいとのねこの願いは叶えられなかった。しかも白いねこの最期は「ねこのとなりで、しずかにうごかなくなっていました」（傍点筆者）とある。すなわち、ねこが飼い主たちの嘆きを余所に平然と死んだように、白いねこはねこの与り知れない時に死んでいたのである。

どんなに言を尽くしても愛情を注いでもそれをどう受け取るかは相手の問題であり誰かを思い通りにすることなど誰にもできないのである。その究極が死である。物語は繰り返し死を語る。死者に向かって話せば分かると迫る者はいないからであろうか。

ところで、絵本は文（言語）と絵（非言語）という2種類のシンボルの集まりがひとつのテキストを構成する表現媒体といえる。上述の「話せば分かるの否定」というテキストの読み（解読）は、シンボルと意味は一対一の関係にないという原理を持ち出すまでもなく唯一の正解（＝正しい解読）とはいえない。

ためしに書籍も扱う大手物販サイトのAmazonで本書のレビュー欄をのぞいてみるとその件数の多さに驚く。同サイトで発売以来日本で一番売れている（トーハンミリオンブック2010年度版調べ）と紹介されている、松谷みよ子作・瀬川康男絵「いないいないばあ」でもレビュー件数は156件であるが、「100万回生きたねこ」はそれを大きく上回り244件（2013年3月現在）を数える。それらのレビューからは、好悪の別も含めて正反対ともいえるような解読のバリエーションが見られるのである。どの解読が正しいのだろうか。それを判断できる者はいるのだろうか。

作家自身はこの絵本について多くを語っていない。「一匹の猫が一匹のめす猫にめぐり逢い子を産みやがて死ぬというそれだけの物語だった。『100万回生きたねこ』というただそれだけの物語が、私の絵本の中でめずらしくよく売れた絵本であったことは、人間がただそれだけのことを素朴にのぞんでいるという事なのかと思わされ、何より私がただそれだけのことを願っていることの表れだった様な気がする」[4]と後日記しているぐらいであろうか。

自分のつくりだしたものであるのに、「～だった様な気がする」というこの曖昧さは何だろう。作家の手中にあった「意味」はシンボルに翻訳された途端、それらシンボルは自生しはじめ、作家自らも新たな意味をそこに見い出し（解読）うるということであろうか。

そうすると作家自身もテキスト完成後は受け手（読者）のひとりと変わりなく、どの解読が正しいのか判断のつく者はいないということになる。すなわちどのような解読も正解であり誤読である。絵本「100万回生きたねこ」はその物語のみならずテキストそのものが話せば分かるを否定しているわけである。作家と読者は永遠にすれ違い続ける。「100万回生きたねこ」を話せば分かるを否定する絵本であると筆者が述べたのは、この意も含んでいる。

われわれは話せば分かるを手放さなければならない。それはけっして敗北ではない。われわれの掌中にはそれですべてが残されることになる。

「100万回生きたねこ」の物語の終わりをもう一度見てみよう。100万回の生き死にを繰り返したねこであったが「もう、けっして生きかえりませんでした」とある。そのページには遠く向こうに人家の見える原っぱに一本の草が伸びている風景が描かれており、読者はなぜねこは生きかえらなかったのか、ねこのいないページを見つめてひとりで黙考せざるを得なくなる。テキストはそれ以上何も語らないからである。

仮に「もう、けっして生きかえりませんでした」の後に「ねこは天国で白いねこといつまでもいっしょにくらしました」の一文が付いていたならどうだろう。おそらく、読者がなぜねこは生きかえ

らなかったのか、問うことはないだろう。言い換えれば、「ねこは天国で白いねこといつまでもいっしょにくらしました」等の一文がないことで読者はどのような解読も可能となる。すなわち誤読の自由が与えられたわけである。

話せば分かるの前提はわれわれの心中に余計な波風を立てるのみならず、誤読の自由を奪い掌から多くのものを零れ落ちさせる。「患者を了解しなくてはならないと一般に信じられているが、了解ということは全くの幻想である」[5]と断じたのは精神科医のラカンであるが、治療者は患者のことを簡単に分かった気になっては困るということであろう。ラカンの言葉は、治療者－患者関係のみでなくすべての話し手－受け手の間にも当てはまるのではないだろうか。「100 万回生きたねこ」は「話せば分かるは幻想であることが現実であること」を教えている。

引用文献
1 佐野洋子　1977 年　講談社
2 橋本満弘　畠山均　丸山真純　2006 年　教養としてのコミュニケーション　北樹出版
3 同上
4 佐野洋子　1987 年　私はそうは思わない　筑摩書房
5 小出浩之　1999 年　シニフィアンの病い　岩波書店

－ 2013. 3. 18 受稿 、2013. 3. 19 受理－